

泌尿器科

(スタッフ)

部長 : 友田 稔久
副部長 : 波止 亮 (2021. 4月から)
 : 阿部 立郎 (2021. 3月まで)
主任医師 : 辻田 次郎 (2021. 4月から)
 : 山田 茂智 (2021. 3月まで)

合計3人の医師で対応させていただいており3月末で阿部副部長、山田主任医師が退職され波止副部長、辻田主任医師が着任されました。外来診療に関しては新患、再診とも月曜、水曜、金曜を診察日とさせていただいており、火曜と木曜は休診とさせていただいております。手術は火曜、木曜の終日と水曜午後に施行させていただいております。医師以外の泌尿器科外来のスタッフとして藤瀬志津、中島愛子の専任看護師2名が勤務しておりましたが外来再編に伴い11月より津崎看護師が藤瀬看護師に代わり2名で診察にあたっております。

(診療実績)

2021年の新入院患者数は546人で前年比4.4%減、平均在院日数が7.7日と前年より1日減となっております、ほぼ前年通りと考えます(図1)。延べ外来患者数は月平均670人で前年(772)比13.3%減少しましたが、新外来患者数は1年で658名と2020年より13.0%増加しました。手術件数は488例と前年(508)比3.9%減少でした(図2)。腎(尿管)悪性腫瘍手術51例のうち98.0%の50例を体腔鏡下手術で行っており、腎がん手術に対しては58.8%の20例で腎機能温存を図るべく腎部分切除術を行っております(図3)。また腎部分切除術に対してはすべて体腔鏡下手術で行っており、また腎盂尿管がんに対する鏡視下リンパ節郭清も引き続き施行し低侵襲化を図っております。また前立腺がんに対する腹腔鏡下根治的前立腺摘除術を2020年は15例施行、浸潤性膀胱がんに対する膀胱全摘除術は全例腹腔鏡下で施行し、副腎摘除も含めると体腔鏡下手術は前年比3.5%増の88例(図4)となっております。また膀胱がんに対しての小腸を用いた代用膀胱造設も施行しており、QOLも含めたがん治療を行っております。また放射線科の御協力を頂いて前立腺がんに対する強度変調放射線治療(IMRT)も増加しており、がん拠点病院としての責務を果たすべく診療を行っております。小児泌尿器科分野でも体腔鏡下手術を取り入れ、先天性水腎症に対する腹腔鏡下腎盂形成術を5例、膀胱尿管逆流症に

対する腹腔鏡下逆流防止術も2例施行しております。外来診療においては3診制とし、初診患者にはまず問診を取り必要な検査を伝えることならびに再診の患者には時間予約制として待ち時間を少しでも減らすよう努めております。病診連携病院よりの紹介は電話予約をいただくことで診療がスムーズにできるように工夫しており、紹介率は90.0%、逆紹介率は131.2%と改善しております。

診療上特に気をつけていることは、セカンドオピニオンを含め、患者に丁寧な説明をして、病状を理解し納得のいく治療を選択していただくことにあります。病棟においても看護師、薬剤師と十分なコミュニケーションをとって患者の満足度の高い医療をチームで行うことができているものと考えております。その一例として、膀胱がんによる膀胱全摘+尿路変更手術では、医師、看護師が患者に十分な説明をして手術に対する患者の不安を取り除くように努め、術後退院されてからも、通常の外來経過観察に併行して外來看護師、皮膚・排泄ケア認定看護師を中心にストーマ外來を行って、患者のニーズに応えるようにしております。

(今後の方向性)

あらゆる泌尿器領域のがんで、手術療法、化学療法、放射線療法、免疫チェックポイント阻害薬を含めた集学的治療を行っていきます。また、制がん効果のみにとらわれることなく腎(尿管)がんに対し腹腔鏡による低侵襲手術や、腎がんにおいて正常腎の温存を図る腎部分切除術、前立腺がんに対する腹腔鏡下根治的前立腺摘除術、膀胱がんに対する腹腔鏡下膀胱全摘除術と、なるべく低侵襲の手術を行うことでがん治療の拠点病院として活動していきます。閉塞性尿路感染症を代表とする緊急性の高い疾患に対応し、尿失禁、骨盤臓器脱などの女性泌尿器科手術や神経因性膀胱、小児泌尿器科領域など特殊性の高い領域にも適切な方針決定と手術療法を含めた治療、長期フォローも行っていきます。

(文責：友田稔久)

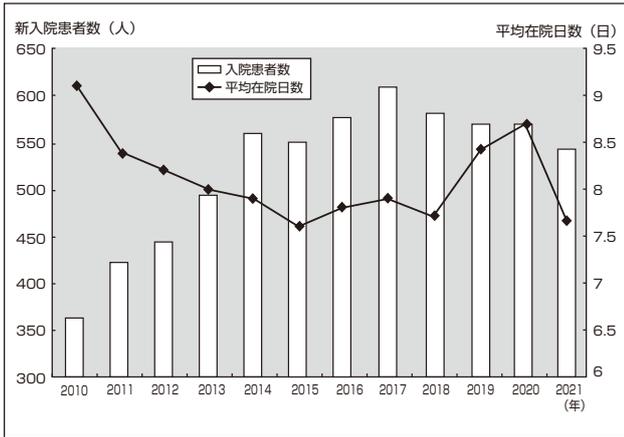


図1 新入院患者と平均在院日数の推移

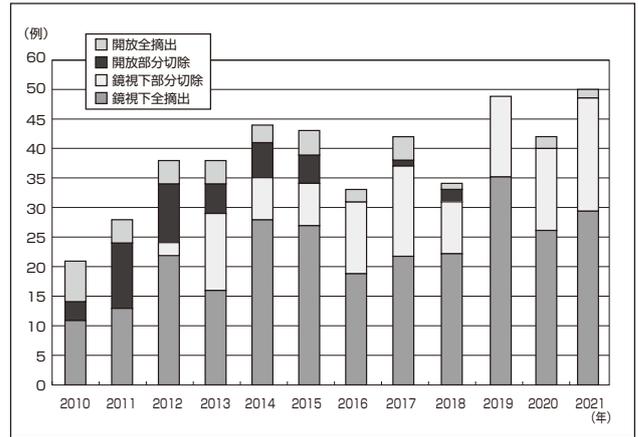


図3 腎（尿管）悪性腫瘍手術の内訳

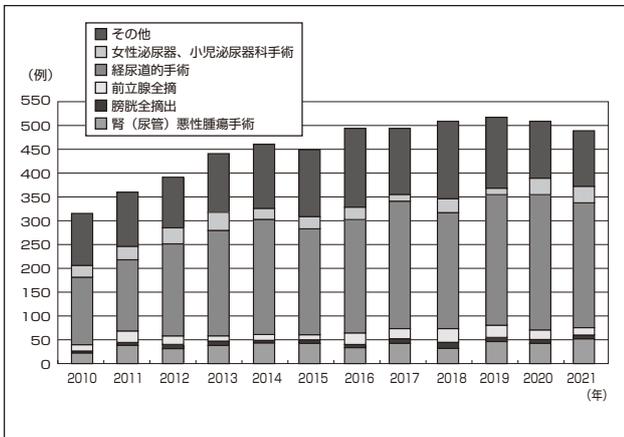


図2 手術件数の推移

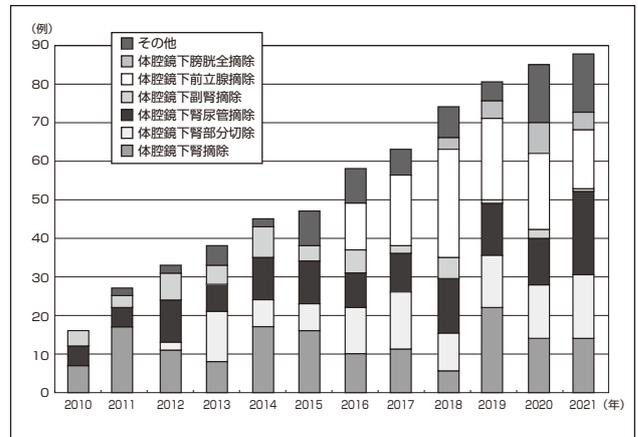


図4 体腔鏡下手術の推移